

法政大学出版局編集部セレクト

中島隆博『悪の哲学——中国哲学の想像力』(筑摩選書, 2012年)
中島隆博『共生のプラクシス——国家と宗教』(東京大学出版会, 2011年)
中島隆博『『莊子』——鶏となって時を告げよ』(書物誕生——あたらしい古典入門)(岩波書店, 2009年)
中島隆博『哲学』(ヒューマニティーズ)(岩波書店, 2009年)
中島隆博『残響の中国哲学——言語と政治』(東京大学出版会, 2007年)
齋藤希史『漢字世界の地平——私たちにとって文字とは何か』(新潮選書, 2014年)
齋藤希史『漢文脈と近代日本』(角川ソフィア文庫, 2014年)
齋藤希史『漢文スタイル』(羽鳥書店, 2010年)
伊東貴之『思想としての中国近世』(東京大学出版会, 2005年)
土屋昌明『神仙幻想——道教的な生活』(春秋社, 2002年)
アンヌ・チャン『中国思想史』(志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳, 知泉書館, 2010年)
B.A. エルマン『哲学から文献学へ——後期帝政中国における社会と知の変動』(本間次彦・林文孝ほか訳, 知泉書館, 2015年)
J.L. ボルヘス『新編バベルの図書館 六』(国書刊行会, 2013年)
J.L. ボルヘス『続審問』(中村健二訳, 岩波文庫, 2009年)
ドゥルーズ＝ガタリ『哲学とは何か』(財津理訳, 河出文庫, 2012年)
『現代思想 特集＝いまなぜ儒教か』(2014年3月号)
『『論語』入門——古いからこそいつも新しい思想』(河出書房新社, 2015年)
『新訳 紅樓夢』(井波陵一訳, 2013～2014年, 7冊分冊)
澁澤龍彦『高丘親王航海記』(文春文庫, 1990年)
袁珂『中国の神話伝説』(上下, 鈴木博訳, 青土社, 1993年)
ジョゼフ・ニーダム『文明の滴定——科学技術と中国の社会』(橋本敬造訳, 法政大学出版局, 2015年)
銭存訓『中国の紙と印刷の文化史』(久米康生訳, 法政大学出版局, 2015年)

シリーズ・キーワードで読む中国古典 編著者が選ぶ!! 古今東西の知を横断するためのブックリスト30

法政大学出版局

《シリーズ・キーワードで読む中国古典》とは？

『論語』などを読むことがブームだが、中国の古典について、われわれは何を知っているだろうか？
本シリーズは中国文学、中国思想研究の第一人者たちが編集するいわば「キーワード集」であるが、各巻がその扱う題材によって縦横に内容を展開させ、一冊一冊が独立した読み物として構成される。最新の研究成果を踏まえた第一級の研究書であると同時に、幅広い読者層に読まれるように題材は広く求められている。各巻につき、編集委員から一人が責任編集にあたり、編者により巻頭に「総説」を置く。
総説から、各キーワードにおけるテーマあるいは概念にあわせて、マッピングが行われ、論考が展開されていく。
哲学、文学、芸術、嗜好など幅広い題材から必読の文献を選び、原典から適宜抜粋して原文と翻訳の対照ができるように配置して、論じていく。
本シリーズは、「古典入門」として位置づけつつも、キーワードで〈読む〉こと、論じることを主眼にしており、ガイドブックや解説書とは一線を画す。
中国だけでなく日本を含めて「近代」そのものを問い直し、本質主義から脱却するために古典を読む。
古典への回帰や再生ではなく、古典による転回を行いつつ、現在の「知」について批評的であろうとする。

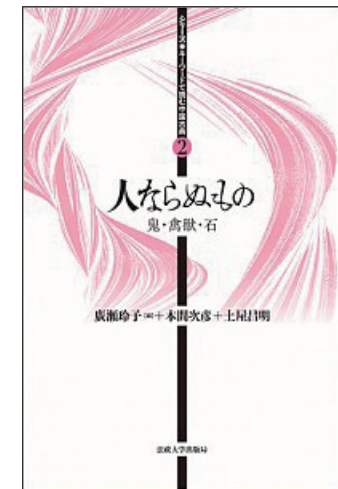
- 《凡 例》
第一巻『コスモロギア』に関する書籍➡❶
第二巻『人ならぬもの』に関する書籍➡❷
第三巻『聖と狂』(仮)に関する書籍➡❸
第四巻『あらわれのアルス』(仮)に関する書籍➡❹
第五巻『治乱のヒストリア』(仮)に関する書籍➡❺

《シリーズ・キーワードで読む中国古典1》 コスモロギア 天・化・時



中島隆博, 本間次彦, 林文孝
ISBN: 978-4-588-10031-4 C1310
2015年/四六判・218頁・定価(本体2200円＋税)
装幀: 奥定泰之
★本巻では、天・化・時の3つの概念に焦点を当て、中国の宇宙論的想像力であるコスモロギアを概観していく。人間は天に大きく規定されながらもそれをはみ出し、変化に翻弄されながらも変化を統御し、時宜を得た判断を行って、この世界に善を実現しようとするものである。人間世界を規定する条件は何か。古典による転回を行い、「近代」そのものを問い直し、現在の「知」について批評的であろうとする。新シリーズ、待望の第一巻刊行。

《シリーズ・キーワードで読む中国古典2》 人ならぬもの 鬼・禽獣・石



廣瀬玲子, 本間次彦, 土屋昌明
ISBN: 978-4-588-10032-1 C1310
2015年/四六判・262頁・定価(本体2600円＋税)
装幀: 奥定泰之
★人は人をどのようなものだと考えてきたか。人が行うこの自己規定は、裏を返せば「人ならぬもの」を規定することである。人ならぬものとは、人に及ばないもの、そして人を超えたものだ。人間世界を規定する条件を論じた第1巻に続き本巻は、鬼(＝死者の霊)・禽獣(＝動物)・石を手がかりに、幽霊の出没、聖獣の出現、人から動物への変身、子を産む石や食べられる石など不思議で多彩な物語とともに、人を超えた豊かな文化の営みを論じる。

第一巻◎中島隆博編 好評既刊!! ISBN9784588100314	『コスモロギア』	()冊	帖合・番線
第二巻◎廣瀬玲子編 2015年12月刊行 ISBN9784588100321	『人ならぬもの』	()冊	
第二巻◎志野好伸編 2016年3月刊行予定 ISBN9784588100338	『聖と狂』(仮)	()冊	
第四巻◎齋藤希史編 2016年6月刊行予定 ISBN9784588100345	『あらわれのアルス』(仮)	()冊	
第五巻◎伊東貴之編 2016年10月刊行予定 ISBN9784588100352	『治乱のヒストリア』(仮)	()冊	
編著者選書フェアリスト ()部			
ご担当者様名:			
お電話番号:			

一般財団法人
法政大学出版局
Hosei University Press
〒102-0073東京都千代田区九段北3-2-3
3-2-3 Kudankita, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-0073, Japan
Tel. 03-5214-5540 | Fax. 03-5214-5542
Mail.sales@h-up.com
http://www.h-up.com/

中島隆博 (東京大学東洋文化研究所教授)

著者＝フランソワ・ジュリアン　訳者＝中島隆博

勢——効力の歴史(知泉書館, 2004年)

歴史・美学・文学・哲学を横断しながら、配置から生じる力である「勢」を、比較思想の観点から論じたもの。→⑤

-

著者＝丸尾常喜

魯迅——「人」「鬼」の葛藤(岩波書店, 1993年)

魯迅の作品を「鬼」に注目しながら、幽霊論の観点から読解した名著。「人」の領域を近代中国においてどう構築していくのが問われる。→①

-

著者＝ジョルジョ・アガンベン　訳＝高桑和巳

ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生(以文社, 2003年)

聖なるものでありかつ排除されたものである人間とそれを生み出したヨーロッパの文化的背景を論じる。→⑩

-

著者＝ジャック・デリダ　訳者＝足立和浩

根源の彼方に——グラマトロジーについて上・下(現代思潮社, 1976年)

西洋形而上学におけるエクリチュールとパロールの位階秩序を転倒しながら、根源が代補されていると論じる。→⑧

-

著者＝武田泰淳

司馬遷——史記の世界(講談社文芸文庫, 1997年)

世界の複数性に震撼しながら、「人間天文学」としての歴史を『史記』に見いだしたもの。「わけもなく自壊する」世界の相を見すえる。→⑨

-

廣瀬玲子 (専修大学教授)

著者＝ジン・ワン　訳者＝廣瀬玲子

石の物語——中国の石伝説と「紅樓夢」「水滸伝」「西遊記」を読む(法政大学出版局, 2015年)

人が石になる。石が成長する。石が予言する。石にまつわる伝説・思想・文学。玉と石とがひらく道徳と倫理の次元。石には中国の哲学と美学が凝縮されている。→④

-

著者＝須田郡司

世界石巡礼(日本経済新聞出版社, 2011年)

フォトグラファーであり「石の語りべ」である著者による世界各地の巨石・奇岩・洞窟などの写真とエッセイ。石から信仰や思想が生まれるのも当然のように思われてくる。

-

著者＝ジャック・デリダ　訳者＝港道隆

精神について——ハイデggerと問い(平凡社ライブラリー, 2010年)

ハイデガーの「精神」論をめぐって、「石は世界をもたない。動物は世界が貧しい。人間は世界形式的である」という最近よく引用されるテーゼも登場する。「精神」とはGeistであり、Geistは亡霊でもあるのだ。

-

著者＝梨木香歩

家守綺譚(新潮文庫, 2006年)

学生時代に亡くなった友人の実家に一人で住む綿貫征四郎。和風の庭のあるその屋敷には死んだはずの友人や動物がふとやってくる。淡々と出没する「人ならぬもの」たちとの交歓。

-

著者＝レヴィ＝ストロース/エリボン　訳者＝竹内信夫

遠近の回想(みすず書房, 1991年)

この地球はいずれ存在しなくなり、人間が作りだしたすべてが消えて何も残らないだろう。人はそのことを十分知ったうえで、それでも生活し、働き、考え、努力しなければならない(レヴィ＝ストロース)。「人ならぬもの」から、再び「人」について考えるために。

志野好伸 (明治大学准教授)

著者＝ミルチャ・エリアーデ　訳者＝風間敏夫

聖と俗——宗教的なるものの本質について(法政大学出版局, 2014年新装版)

聖なる空間・時間や聖なる創造が、現実にとどのように再現されるかを、豊富な神話資料を通じて示し、その意味を宗教学的に解き明かす。あわせて近代化以降の、聖なるものの喪失についても論じる。

-

著者＝大室幹雄

新編 正名と狂言——古代中国知識人の言語世界(せりか書房, 1986年)

ことばをたった一つの武器として権力と渡り合った、先秦から漢代の知識人の活動を、M.フーコーやE.ノイマンなどを利用しながら縦横に論じる。権力側の志向する「正名」に対決する批判的「狂言」の豊かさが看取できる。

-

著者＝塘耕次

米芾——宋代マルチタレントの実像(大修館書店, 1999年)

怪石を溺愛するなどの奇行で知られる宋代の書家、米芾についての研究書。米芾という宋代を代表する文人を通して、創作だけでなく、収蔵、鑑識、偽作など、中国における芸術の諸相が見通せる。

-

著者＝小川隆

『臨濟録』——禅の語録のことばと思想(岩波書店, 2008年)

唐代を代表する禅語録である『臨濟録』を、過去の解釈史を批判的に踏まえながら、原文に寄り添って丹念に、かつ理路整然と読み解く。『臨濟録』に登場する狂僧の普化にも一章を割く。

-

著者＝金子光晴

絶望の精神史(講談社文芸文庫, 1996年)

近代日本の「狂者」の代表とも言える詩人、金子光晴の目から見た同時代史。日本人でありながら、日本の情勢いっさいに注意も関心ももたない「エトランゼ」を自負する著者による抵抗の書。

-

伊東貴之 (国際日本文化研究センター教授)

著者＝井筒俊彦

意識と本質——精神的東洋を求めて(岩波書店, 1983年/岩波文庫, 1991年)

「東洋」とは、自らの「他者」によって名指された「非西洋」とでも形容するほかない概念である。それは地域的な概念でも、実体的な文明・文化の呼称でもない。来るべき「哲学」が開示される「現場」である。→③

-

著者＝ジン・ワン　訳者＝廣瀬玲子

石の物語——中国の石伝説と「紅樓夢」「水滸伝」「西遊記」を読む(法政大学出版局, 2015年)

「物語」は石から始まった!— 封印されていた石が虚空に解き放たれる時、新たな生命が宿り、新しい物語が始動し、絢爛たるフィクションが紡ぎ出される。→④

-

著者＝大室幹雄

新編 正名と狂言——古代中国知識人の言語世界(せりか書房, 1975年)

言語の権力に対して、狂言綺語と滑稽で立ち向かう知識人たちの連戦連敗、必敗の記録。その直中から、ロゴスの顕現とともに生成した西欧の哲学とは異貌の、中国的な道(タオ)と風狂の世界が立ち現れる。→⑥

-

著者＝ジル・ドゥルーズ　訳者＝財津理

差異と反復(河出書房新社, 1992年/河出文庫上・下, 2007年)

「差異」を同一性への従属から解放し、自身のポテンシャルにもとづく微分的な「反復」の運動の裡に再定位し直すことで、西欧の形而上学の根柢的な顛倒とともに、新たな芸術の生誕を告知する。→⑦

-

著者＝島田虔次

中国の伝統思想(みすず書房, 2001年)

碩学の遺著から響き渡る沈鬱な旋律。それは、偉大な過去の文明に対する、挽歌とか詠歌とでも名づけるほかない、哀切なオマージュである。通奏低音として、儒教の政治思想の現代性を示唆する。→⑧

-

本間次彦 (明治大学教授)

著者＝山田慶児

黒い言葉の空間——三浦梅園の自然哲学(中央公論社, 1988年)

18世紀日本の思想家、三浦梅園の主著である『玄語』は、難解さをもって知られる。本書は、朱子学を中心とする中国の自然学の伝統の中から、『玄語』の特異な理論構成が立ちあがってくる過程を活写する。

-

著者＝佐藤実

劉智の自然学——中国イスラーム思想研究序説(汲古書院, 2008年)

朱子学的用語法や中国の自然学の伝統を利用しながら、漢文でイスラームの教えを表現すること。18世紀初めに刊行された劉智『天方性理』は、その代表例である。本書は、『天方性理』を読むための基礎的知識を提供する。

-

著者＝大室幹雄

新編 正名と狂言——古代中国知識人の言語世界(せりか書房, 1986年)

戦国時代から漢の武帝朝に至るまでの過程を、本書は、ことばをめぐる思考の歴史として描きだしていく。儒家、道家、始皇帝から司馬相如、武帝までのオールスターキャストで、叙述は変幻自在に展開していく。

-

著者＝ジョルジョ・アガンベン　訳者＝岡田温司・多賀健太郎

開かれ——人間と動物(平凡社ライブラリー, 2011年)

-

著者＝ジャック・デリダ　訳者＝鶴飼哲

動物を追う、ゆえに私は(動物で)ある(筑摩書房, 2014年)

「人間を動物から区別するこの人間とは何者か」について考察する現代思想の試み。「どのようにして人間が非人間から、動物的なものが人間的なものから——人間のうちで——分割されてきたのかを自問してみる」ようアガンベンは求め、「誰が誰に応答するのか?彼らがこのように平然と「動物」と呼ぶものの、一般的単数の普通名詞に、誰が応答するのか?誰が主語として応答するのか?」とデリダは問いかける。

-

林文孝 (立教大学教授)

著者＝溝口雄三

中国思想のエッセンスI——異と同のあいだ(岩波書店, 2011年)

本シリーズ全体とも通じるキーワード式の中国思想概観だが、日本との比較に強く方向付けられているところが違う。比べてみることで本シリーズの特徴が浮き彫りになってくる。

-

著者＝菊地章太

老子神化——道教の哲学(春秋社, 2002年)

比較宗教学で活躍する著者の比較的早期の著作。時間としての「道」についての解釈を本書で読んだときの衝撃が筆者には忘れられない。→②

-

著者＝入不二基義

時間は実在するか(講談社, 2002年)

第一章で、時間の謎という場におけるマクタガートとナーガールジュナや山田孝雄との出会いが語られる。では、中国思想との出会いはあるのか。→③

-

著者＝内藤湖南

支那史学史1・2(平凡社, 1992年)

京都帝国大学での講義にもとづく。該博な知識と高い識見に裏打ちされた洞察と論断が持ち味だが、それが同時に疑問の種ともなりうる。→④

-

著者＝土田健次郎

江戸の朱子学(筑摩書房, 2014年)

中国の正統論については、日本の皇統論との関係も気にかかる。このことを含め、朱子学が日本でどのような思想的問題をもたらしたかを提示してくれる。→⑤

-

